

# 「命の大切さをはぐくむ保育」公開講座 開催記録

## 1 日時

平成20年10月26日（日） 午前10時から午後4時まで

## 2 場所

名古屋短期大学 524教室

## 3 講演

「命の大切さをはぐくむ保育者へのメッセージ」

〔講師〕 神田 英雄 氏（桜花学園大学教授）

## 4 参加者数

約230名

## 5 内容（要旨）

### 【主催者あいさつ】 愛知県県民生活部学事振興課 主幹 佐伯剛志

今日はたくさんの方にお集まりいただきありがとうございます。これほど多くの方にお集まりいただけましたのも、偏に本日の講師をお願いしております神田先生のお力によるものであると思いますが、それとともに、ご参加いただいた皆様方の熱意の表れだと思えます。まずもって感謝申し上げます。

さて、愛知県では、平成18年度から「命を大切に作る心を育む教育推進事業」に取り組んでおり、県内の幼稚園・保育所、小中学校から、公立・私立を問わずモデル園・モデル校を選定しており、今年度も99の園・校で取組を進めていただいております。

当事業は、これまでの3年間で315園・校で取組を行っていただいておりますが、さらに取組を普及するためには指導者の皆様方のお力が非常に大切ではないかと考えております。そこで、現任保育士研修運営協議会のお力をお借りし、指導者の方を対象とした講座を昨年度に引き続き開催することといたしました。

現場で保育や教育にお取り組みいただいております皆様方には、本当にご努力をいただいているところでございますけれども、改めまして、命の教育に一層の力を注いでいただきますことをお願いいたします。



## 【講演】「命の大切さをはぐくむ保育者へのメッセージ」桜花学園大学教授 神田英雄 氏

### ○ はじめに

おはようございます。

私は発達心理学が専門ですので、子どもの各年齢に応じた命に対する感じ方をお話しさせていただきます。これを本日の講演の中心とし、他にもお伝えしたいことがありますので、関連してお話をしたいと思います。

### ○ 保育者へのメッセージ

子どもが命の大切さをはぐくむようになるためにはどうすればよいかについてお話をする前に、保育者のみなさんにお話しておきたいことがあります。

子どもを大切にしようという保育者の気持ちが子どもに伝われば、子どもは必ず周りの人を大切にする子になるのだと思います。保育者のそうした気持ちが子どもに伝わっていなければ、いくら命の大切さを理屈で教えても、本当に分かったことにはなりません。皆さんの存在自体が、子どもに命の大切さを教えるのです。



私自身も自分の子育てで悩んだことがあります。その時に保育者は親でもないのに私と一緒に気持ちになってくれました。親と同じ気持ちになって悩んでくれる人がいる。そういう人がそばにいるから親として頑張れると思いました。本当に子どものために一所懸命な存在が、日本には保育者という形で存在するのだと自分の体験を通して身に沁みて感じました。日本の子どもにとって、初めて先生と呼ばれるのが保育者であることは幸せなことであり、また、親にとってもすごく幸せなことだと思います。

だから、命の大切さをどう伝えるかということ以上に、保育者自身が命を大切にしている存在であれば、そのことが即ち、子どもに命を大切にすることを伝えていることであり、それが一番大事なことではないかと思います。

### ○ 「頭で分かる」を超えた「感じ方」を育てることが、命を大切にすることを

「命は大切か？」と子どもに聞けば、「大切だ。」と答えます。しかし、頭で分っているからといって、その子が本当に命を大切にしているかの保証はありません。頭で分るといっただけでなく、身に沁みて分かっているならば、本当に命を大切にしている子にはならないと思います。

幼児期は、命という概念自体が未形成です。命という言葉を使って教えることも大切ですが、深い意味で理解するまでの力はないというのが、幼児期の発達段階

階なのです。「頭で分かる」を超えるという意味は、頭で分っただけでは分ったことにならないという意味と、幼児期に関しては頭で分ることが難しいという2つの意味があります。

だからといって、幼児期には、命を大切にしたい気持ちの芽が育っていないのかというと、そういうわけではありません。やがて、命という言葉につながるような気持ちは育っています。命ということを理解できるようになってからしか、命の教育ができないわけではありません。

では、どのように命の大切さを教えればよいのか。

命の大切さを言葉で教えることも大事ですが、親、保育者、先生など周りの人が「あなたのことをこんなに大切に思っている。」ということが子どもに通じている時に、子どもは自分を大切にできるのではないかと思います。だから、保育という営みの出発点は、子どもが命の大切さを理解できるようになる前から、周りのみんながあなたを大切にしているということ伝えることなのです。それをベースとして、子どもの中に他の人の命も含めて命を大切にしようという気持ちが育ってくるのです。命の大切さを教えるとは、そういうものでなければいけないと思います。

## ○ 「命の大切さ」を育てる乳幼児期の育て方とは？

### 〈1～3歳〉

- ・ **親や保育者は子どもを守ろうとする。しかし、子どももまた・・・。優しさの始まり。**

子どもが自分を初めて意識するようになるのは、1歳半頃だと考えられます。親を大きな円で、子どもを小さな円で書くと、1歳の前半までは同心円で描けます。つまり、一心同体関係にあります。しかし、1歳半を過ぎると自覚が出てくることから、子どもは、自分は親の一部ではなくて別の人間だと、親の円から飛び出します。これが自我の芽生えです。この時に劇的な変化が起きます。この時から「イヤイヤ」が多くなり、扱いにくい時代が始まります。自我が芽生えると自分は親とは違うと思うので、何でも嫌だということになるのです。自分が好きなことでも嫌だと言います。この年齢は対象物が嫌なのではなく、親に言われるのが嫌だということなのです。親が何かを言うと、とにかく一旦はねつけて、自分は親とは違うということを示したい。これが1歳半の子どもの気持ちなのです。

そして、親の円から飛び出した時に優しさが生まれます。1歳半以前の子は、親と一心同体であることから、親が病気で苦しんでいると、その気持ちが子どもに伝染し泣いてしまいます。それが、1歳後半になると、自分は親と別の人間だと思うので、気持ちは伝染はしますが、何とかしなければと思い、親の額に手を当て介抱しようとしています。こうして、優しさが発揮されるのです。1歳の後半は「イヤイヤ」で手こずらされますが、頼もしいところが出てきます。

保育をするには信頼関係が大事だと言われます。信頼関係というのは、保育者が子どもを守ることによって信頼関係ができるという一方通行ではありません。子どもも

保育者を守ろうとするのです。保育者が子どもを守ろうとして、子どもも保育者を守ろうとする。その両方がつながった時に初めて信頼関係ができるのです。それは子どもの年齢が1歳であろうが、そういった信頼関係ができるのだと思います。

子どもは生まれた時から、人を大切にしよう、人に優しくしようという気持ちは生まれています。保育者が子どものことを大切に思って関わり、子どもが保育者のことを好きだと思えば、子どもの優しさが引き出されるのだと思います。このように、人を大切に作る気持ちが1、2歳の頃から生まれてきているのです。子どもとの信頼関係を作ろうとせず、躰と称して厳しい対応をするばかりでは、子どもの優しさは育ちません。

- ・ **受け止められて、「心の中の人」が生まれる。**

万引きをして見つかったら親が土下座させられると思えば、そんなことはできなくなります。人の心の中にはたくさんの方が住んでいます。心の中に住む人がいるから、子どもは悪いことをしなないのです。心の中に人が住み、子どもを導いてくれます。保育をするということは、その子の心の中に保育者が住むことなのです。親ばかりでなく、保育者も子どもの心に住むことができるのです。そう考えると、保育という仕事は、本当に素晴らしい仕事なのだと思います。



いつ頃から子どもの心の中に人が住み始めるのかというと、乳児期だと思います。個人差はありますが、人見知りとは0歳の時期に始まるからです。

母親がいないと泣いて後を追うという「後追い」は、ピークは1歳半頃ではないかと言われています。1歳半は、自分が親の一部ではなく1人の人間だと思い始める時期ですが、果たして自分1人でできるだろうかという不安があります。見守っていてくれないと不安なので後追いをします。

2歳、3歳になると後追いを卒業していきませんが、なぜ後追いをしなくなるのかというと、親や保育者が心の中に入ったからです。今は母親はいないが、心の中に母親がいるから我慢ができるのです。後追いを乗り越えるプロセスは、親が子どもの中に入っていきプロセスなのです。

だから、その時期に、見守られていると感じられる経験をたくさんさせることが、心の中の人を育てるスタートラインなのではないかと思います。見守ってくれたということは、受け止められたということであり、受け止められて心の中の人生まれるのです。心の中に人が生まれ、やがてそれが子どもを導くようになります。だから、乳児保育は大切なのです。ただ、預かりさえすればいいわけではないのです。

- ・ **この時期から、自分に対する投げやりな気持ちと“荒れ”が見られ始めることも。  
→大人と共に「心のアルバム」をつくらう。**

保育は、まずは子どもを受け止めることが原則であり、例えば、友だちのおもちゃを取り上げた場合でも、まずは、そのおもちゃが欲しかったというその子の気持ちを受け止めた上で、良くないことをしたと気づかせることが必要です。

子どもを受け止めるとは、今の瞬間の気持ちを理解するだけでなく、その子の過去も含めて理解するということです。過去の悲しいこと、楽しいこと、我慢したことなど、子どもがそうやって生きてきたということを共有してあげることが大切なのです。そうやって受け止められると、子どもの心は安定します。

2歳頃になると、自分に対する投げやりな気持ちが見られることがあります。そんな時は、一緒に「心のアルバム」を作るとよいと思います。遠足の写真を見ながら、「ここに行ったよね。」という会話をするだけで、子どもは自分の過去を共有してくれる人がいるという安心感を持つことができます。

今の社会状況からすれば、長時間保育は必要な仕組みだと思います。ただ、子どもの過去を共有するという点に関しては不利な面があります。だからこそ、保育者としては、ただ預かりさえすればいいというわけではなく、子どもが自分が受止められていると感じられるような対応を心掛けることが大切です。

#### 〈4歳～5歳から〉

##### ○ 思いやりを求め、思いやりを育てる時

3歳の後半から4歳にかけて、子どもたちの意識は質的に変化します。この子とは仲良しだ、この子はけんか相手だというように、人間関係を認識の対象にするようになります。そして、人間関係を意識することから、人間関係を作りたいと努力をするようになります。しかし、例えば、友だちを作ろうと努力はしますが、どういう状態が本当の友だちなのかということに対する理解はついてきていません。だから、勘違いの努力が始まることがあります。友だちとは、相手の子が自分の指示に従うことだと勘違いすると、親分のように振舞ったりします。端から見ると、乱暴に思える子がいますが、友だちを求めながらもどうすればよいかわからず、そういう行動に出ている場合があることを理解してあげたいと思います。一方的に悪い子であると決めつけると、その子の心の中にある寂しくて友だちが欲しいという気持ちが見逃されてしまうのです。

4歳から5歳にかけては、人間関係を意識し、人間関係を作りたいと努力することにより、他の子の気持ちがよく分るようになります。子どもは自分のことを自覚しているので、他の子がある行動をした時に、自分の過去にその子の姿を映し出すことにより、その子の気持ちが分るようになります。そして、人の気持ちを大切にするという優しさが出てくるのです。人の気持ちが分り、人の気持ちを大切にすることがなければ、命は大切だと頭で理解させても、それは上辺だけのものに過ぎません。4、5歳は人の気持ちや人との関係に目が向くので、思いやりを求め、また、人を思いやる気持ちが育っていきます。幼児教育の一つのポイントは、ここにあるのではないかと思います。

○ **だけど、思いやりをキャッチする「伝わりのチャンネル」が制限されている。**  
→大人の笑顔は「受け入れ」のメッセージ

人間関係に目が向き自覚が始まるこの時期は、友だちとの関係だけではなく、親子関係にも目が向きます。だから、4歳児になると、親が自分のことを好きかどうかをしきりに確認したがります。この時に気をつけるべきことは、親が子どもに愛情を注いでいるつもりでも、子どもの育ちが未熟であることから、与えられている愛情をキャッチする力が弱い場合があることです。通じていたと思うのはこちらの勘違いで、通じていないかもしれないのです。確実に通じるチャンネルの一つは、明確に言葉で伝えることです。そして、もう一つは表情です。親が笑っていると、なぜ笑っているのかは分らないが、自分のことが好きなんだとキャッチします。逆に、子どもに対して怖い顔で接すると、自分に何かまずいことがあったのだろうか、自分のことが嫌いなのだろうかと思います。だから、保育者にとっても、子どもに笑顔を向けることが、子どもの安定のために大事なことだと思います。常に子どもに対し笑顔を向けるということは、この時期にはとても大事なことです。そうすることにより子どもが安定し、人の気持ちがわかるようになり、本当の優しさが出てくるのだと思います。

〈5～6歳から〉

○ **「自分の判断」が成立することによって、「人間観」の萌芽が生まれる。**

年長の最後に、また一つの転換点があります。4歳頃は人の気持ちを求めようとしませんが、よく分かってはいません。しかし、5歳半頃からは人の気持ちもよく分かるようになります。また、4歳児は自分の考えより親や保育者の言うことの方が正しいと思う傾向がありますが、5歳の半ば頃には自分で判断する力がつき、人間観の萌芽が生まれます。幼児期の最後にはこういうところまで到達します。

しかし、自分で判断する力ができるということは、間違ったマイナスの判断力が育ってしまう場合もあります。4歳頃からは、子どもが何かをした時に、口先だけで「上手だね。」と言って自信をつけさせようと思っても、通用しなくなります。その子は自分でも上手ではないと気づいています。その時には、全てが上手ではなくても、良いところを見つけてそこをほめることが大切です。子どもは上手だと言われた部分について、「確かにそうだ。」と感じる。こうして子どもが納得したことが、自分の価値観として育ち始めるのです。事実をないがしろにして、口先だけで子どもを自分の思いどおりに動かそうとしていると、子どもはそれを感じ、年長になり判断力がついた時に、人の裏をかくことを憶えてしまう可能性があります。

だから、年中や年長の頃は、良いことは良い、優しいことは優しいと感じられる人間らしい感性を育てていくということがすごく大事なのではないかと思います。

## 〈小学校の中頃から〉

### ○ 大人を求める時期から、大人を求めなくても生きていける時期へ。

子どもの発達を見ると、小学校では4年生に大きな変化があります。人の心の中には美しいものだけが詰まっているわけではありません。醜いものもいっぱいあるので、自分の心の中はプライバシーとして隠しておきたい。そういう気持ちが生まれてくるのが、小学校4年生頃なのです。悲しいことや苦しいことがあっても、それを外に出さない。外にばれてしまうと恥ずかしいという気持ちがわいてくる。だから、小学校高学年の子はぶっきらぼうなのです。

それは、とても大事な育ちです。悔しいことや悲しいことがあっても、親や先生に言わないということは、それを自分だけの力で処理するという強さが生まれたことなのです。自分でなんとかするということくましい一歩を踏み出したのです。

それは逆に、親から見ると、親の知らないところで子どもが何をやっているかが見えないということになります。そこで、親が根掘り葉掘り聞きだそうとすると、子どもの世界のことに口を出すなということになります。低学年の頃は、親に話を聞いてもらえないと寂しくてたまらなかったが、その頃になると聞いてくれないで聞かなくていいというくらい強さが出てくるのです。

その時に、親の知らない世界で子どもが何をすることがとても大切です。4年生は自立する時であり、親が全てを知っていると自立を妨げますので、親が全部を知らなくても良い時期です。ただ、その時にどういう方向に向うかは大切であり、悪い道に進んでしまうこともあります。だから、そこまでに、万引きしたら母親が悲しむかもしれない、後ろめたいことはやりたくないと感じることができるまで育てて欲しいと思います。子どもの人間観ができる5歳頃までに、世の中はあなたのことを見守っている人間でできているということを伝えておきたいと思います。小さい頃から育てられてきたものが、子どもの中にきちんと形成され、自立していく時には、それが子どもの心の中にしっかりと入ってもらいたい。そういうことが、命を大切に育てるためには大切であると思います。

## 【質疑応答】

最後に意見交換を行いたいと思います。私が発言内容を指定するのではなく、自由に意見を出していただいて、それに対して私がお話できることであればお話をしたいと思います。

### ○ 受講者1

幼稚園要領に示されている「生きる力」は本日のテーマの「命」に関わるものであると思います。この「生きる力」について、先生のお考えを伺いたい。

## ○ 桜花学園大学教授 神田英雄 氏

「生きる力」とは、中央教育審議会の答申の中の言葉であり、そこに示されたような内容も必要だと思いますが、私は「生きる力」をこう考えています。

幼児にとっては過去が一番大切であり、過去が楽しければ、明日からも楽しく生きることができると思います。しかし、小学校に入る頃には、過去は過去として、将来のことを考え始めます。幼児期の場合は、大きくなったら何になると聞いてもイメージがわいていません。しかし、小学生になると、大きくなったらこれになろうという夢や憧れが育まれてきて、それが子どもたちの活力になり、多少の困難があっても頑張ろうという気持ちがわいてくるのではないかと思います。

特に、小学生低学年というのは、高学年のように現実をリアルに感じる前の時期であり、夢を純粋に夢として抱くことができる独特な時代です。その時に夢を語ることができるということが、子どもたちに元気を与えるのではないかと思います。幼児のように過去を見るだけで生きる力が育つわけではなく、過去も大切にしながら未来に夢を持つことにより、子どもの生きる力が育まれるのではないかと思います。

残念ながら、今の小学校の低学年は、漠然とした夢を描くより、現実世界で有効な能力を得ることに重点が置かれ過ぎています。生きる力というのは、夢を描く力が生まれ、それがだんだん現実近づき、努力して自分で自分を形成していく力ではないかと思います。憧れや希望がたくさん詰まった喜びが将来にあるという感覚を子どもに与えることが大切だと思っています。

## ○ 受講者 2

4歳児で、友だちが持ってきたカタツムリをこぶしで潰してしまった子がいました。私はその時、友だちが悲しんでいることやカタツムリがかわいそうだということを話し、最終的には一緒にお墓を作ってあげました。その時の自分の関わりと、子どもの心理について、助言をいただけたらと思います。

ちなみに、今、その子は小学校5年生で立派にやっており、母親は神経質で口うるさいタイプです。

## ○ 桜花学園大学教授 神田英雄 氏

小動物を虐待するというのが、命を粗末にするということと直結するかということについての研究は多くはありませんが、その中の多数派の見解は、哺乳類で身近な友だちにもなれるような動物を虐待することは深刻だが、昆虫などを潰すことは必ずしも人間の命をないがしろにするにはつながらないのではないかとされています。私も、カタツムリを潰すことが、人の命を軽視することにはつながらないと思います。

状況が分かりませんが、友だちのカタツムリを潰した時の幼児の気持ちは、ひよっとすると友だちが羨ましかったのかもしれない。カタツムリが結果的に死んでしまったということだけで、その子の行為が悪いというべきかどうかは保留したいと思います。

ただ、一緒にお墓を作ったり、カタツムリを潰された友だちの気持ちに目を向けたことは良いことだったと思います。子どもによっては、叱られたことに腹を立てて反抗的になる場合もありますが、最終的にお墓を作るという行動ができたということは、カタツムリの命は大切であるということを経験できたということだと思います。

また、この親子がそうというわけではありませんが、親が口うるさいということについて心配なことがあります。子どもが親の顔色を窺い、親が喜ぶことを最優先して、自分がやりたいことを引っ込めてしまうことがあります。このように育った子どもは、女の子は6年生、男の子で中1くらいからいろんな形で影響が出てくる場合があります。例えば、子どものうつ病が急速に増えています。女の子では6年生から、男の子では中1から急増しています。その原因は何かというと、頑張ろうという気持ちが自分を追い詰めてうつ病にさせてしまっているのです。その頑張ろうという気持ちは、親に認められたいから頑張ろうということなのです。

子どもが自分のやりたいことを引っ込めてしまい、親が思うところを優先させてしまう。そういう子どもの生き方というのは、子どもが成長して青年期を迎えた頃から、子どもを苦しめることがあります。それよりも子どもが自分自身でやりたいことを見つけてあげるような子育ての方が良いのではないかと思います。それが、命を大切にすることの裏返しではないかという気がします。

## ○ 受講者3

幼稚園に実習に行った時に、4、5歳の子から「僕がもし、包丁で刺して死んでしまったら、先生はどう思う。」と聞かれました。こんな小さな子でもそんなことを思うのかと思い、私は泣きそうになって「そんなことをしたら、とっても悲しくなるよ。」と答えました。学生の時のことでもあり、その子どもの言葉にかなり衝撃を受けました。その時の子どもの気持ちはどのようなものだったか、自分の対応がよかったのかが気になっています。

## ○ 桜花学園大学教授 神田英雄 氏

一つだけはっきり言えることは、その子の作戦は成功しているということです。3年経っても憶えていてくれるのだから。

包丁は、4、5歳の時期には、武器として意識されやすく、話題に出やすいものだと思います。私も初めて包丁の話聞いた時は、ぞっとしましたが、今は、包丁は幼児語だと思っています。

その子が本当に自殺するつもりで言ったのか、僕のことだけ見て欲しいという気持ちを強調するために言ったのかということに関しては判断が付きません。ただ、そう言った時、子どもは悲しんで欲しいのだと思います。であるなら、悲しんであげればよいと思います。その方が、一時的ではありますが、その子の気持ちを満たしたことにあります。その時の対応としては、保育者であれ実習生であれ人間なのだから、素直な自分の気持ちを出せばよいと思います。それが、子どもが好きだよ、大事だよという気持ちに裏付けられている素直な気持ちであるならば、それが間違いであるとは思いません。

## 【補足とまとめ】桜花学園大学教授 神田英雄 氏

### ○ 補足（発達障害について）

本日は健常児を前提に話をしましたが、障害がある場合は違う可能性があるということを知っておく必要があります。

発達障害を少年犯罪に直結させることは誤りです。それは偏見につながります。ただ、発達障害の子どもを理解することは必要です。発達障害の子どもたちは、多くのケースで、我々の感覚と違った感覚を持っている可能性があります。例えば、聴覚が過敏な子の例で考えると、小さな騒音でもうるさくてたまらないと感じてしまうのです。我々でもイライラした時は、暴力的になることがあります。人間が危害を加える時というのは、その人が命の大切さを感じているかどうかだけではなく、その人がどれほどイライラしているかということなどが影響します。発達障害の子どもたちを、我々と同じ感覚の世界に住んでいると理解して対応してしまうと、その子はイライラを募らせ、暴力的な行動をしてしまう可能性があることに留意する必要があります。

### ○ まとめ

最後に、子どもを育てるということについて、私の経験からお話をしたいと思います。

子どもが自立した後に感じる私の親としての気持ちは、私は自分の子どもに、幼児期から小学生にかけての子ども時代を幸せな時代として提供できただろうかということなのです。

当時は、子どもを少しでも伸ばしたいという気持ちが前に立ち、子どもを追い詰めていました。しかし、今は、1回しかなかった子ども時代を、この子は自分の子どもで幸せだったろうかということ強く思います。

子どもを育てるというのは、子どもの能力を伸ばすということよりも、子どもを幸せにする営みなのだろうと思っています。ですから、それで子どもが幸せになるのか、ということ常に関心しながら、明日へ、明日へという育て方ではなくて、幸せへ、幸せへという育て方が大切なのだと思います。

そして、子どもが幸せであれば、憎しみは生まれません。自分が幸せであれば、人に対して寛容になれるし、人の命を奪いたいという気持ちもわいてこないのではないかと思います。命の大切さを知ってはいいても、自分が不幸せであれば人を殺したくなることもあるのだろうと思います。だから、子どもを育てるということは、子どもを幸せにするということなのだと思います。

あまり頭で考えすぎず、子どもが保育園、幼稚園、学校に来て一日楽しかったと言ってくれる、その連続で日々が進んでいくことが、最終的には命を大切に育てるようになるのではないかと思います。

## 【主催者あいさつ】愛知県現任保育士研修協議会 事務局長 式庄憲二

本日はお疲れ様でした。

この企画は、愛知県の学事振興課と愛知県現任保育士運営協議会の共催という形で実施させていただきました。

現任保育士運営協議会は、今から7年ほど前に設立されました。愛知県立保育大学校が廃校になった折に、研修業務を引き継ぐということで、現在、県内28の保育士養成校が協力・協同で、愛知県から業務委託という形で研修を運営しており、園長研修、主任研修、公開講座などを行っております。今後とも、皆様のお手元に研修や講座のご案内が届きました際には、積極的にご参加いただきたいと思います。

最後に、神田先生には、本当に素敵な講演をしていただきました。感謝の気持ちを込めまして、先生に拍手を贈りたいと思います。

(拍手)

それでは、これをもちまして本日の講座を終了させていただきたいと思います。ありがとうございました。

